



range Breeze

出水市教育委員会だより

令和4年6月30日 No.188

“力をつける”を合い言葉に!!

出水市教育委員会
学校教育課 編

★ そもそも教育の目的とは



教育基本法を踏まえ
2つの面から整理
できます

- 児童生徒一個人としての成長を図ること、つまり、児童生徒の夢や希望を実現し、自己実現を図るために必要な力をつけることである。
- 社会を形成する一員としての成長を図ること、つまり、児童生徒一人一人に社会的役割を担っていく力をつけていくことである。

この意味から考えると、学校で身につけさせる力は様々なものがあります。同時に、現在の我が国は社会のあらゆる面で大きな変革期を迎えています。全ての人が多様な人と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き持続可能な社会の創り手となることが求められているのです。

★ なぜ学力なのか？ 信頼される学校・教員とは……

2003年（平成15年）のPISA（経済協力開発機構OECDが3年おきに実施する国際学習到達度調査）の結果で、日本の順位が急落したとき、当時の日本の教育に対する疑念が国全体に広がったことや、2019年（平成31年度）の全国学力・学習状況調査で鹿児島県が惨憺たる結果となったとき、鹿児島県の教育への不安が県全域に広がることになりました。わずか1回、わずか数科目の結果であるにもかかわらず、日本全体、鹿児島県全体の教育の信頼が大きく揺らぎ、大きな非難を浴びることとなったのです。私たちは、こう痛感します。

「……学力を身につけさせられない学校や教員は、保護者や地域からの信頼を得ることはできない。」と。

★ 変化・挑戦し続ける学校・教員

教育実践に「正解」や「王道」はなく、「この実践を行えば、必ず成果が上がる」などといったやり方は存在しません。学力向上に向けた取組も、絶対的な方法があるわけではないのであれば、我々教員は、目の前の子どもたちを見つめ、我々自身の力を磨き続け、児童生徒に力をつける方法を、常に試行錯誤しながら追究していくほかありません。児童生徒にとっては1年1年が大事であり、今の学年に2度目はありません。過去問の活用や自学ノートを利用した学力向上対策を含め、あらゆる取組を短いサイクルで検証をして問い直し、常に子どもたちに“力をつける”取組に挑戦し続けていく学校・教員として、スクラムを組んで邁進していきましょう。



いま、児童・生徒の力をつけるために、学校の授業にどのようなことが求められているのでしょうか。大学・中学校に直接関わり、あらゆる校種の教育に精通されている先生に話を伺いました。

鹿児島大学教育学部教授（前教育学部長）
鹿児島大学教育学部附属中学校 校長
上谷 順三郎 先生

Q1 現在、大学入試でどんな力が問われているのでしょうか？

大学入試は、小・中・高、特に高校で学んだことを発揮し、そして大学での学びに必要なことを示すためのものです。そして大学での学びに必要な内容になっていると思います。国語科で言えば、例えば、批判的な読み（クリティカル・リーディング）、要約（A4一枚程度）、多様な資料を読み自分の意見を表現することなどです。2000年から始まったPISA調査の影響によるこの出題傾向は、全国学力・学習状況調査でもみられるようになってきています。また、Society5.0の社会でも「基礎的読解力、数学的思考力などの基盤的な学力や情報活用能力」が求められるとされていますし、ICT活用の面でも、多様で多量の情報を扱う機会は増える一方です。つまり、国や世界レベルで、これからの社会を生き抜くために必要な力とみなされているということだと思えます。

Q2 その力の育成のためには、どんな指導が必要でしょうか？

一つのまとまりを「連続的」に示している文章とは違って、図や表、グラフなどの非連続型のテキストは、情報は示していますが、どういった情報なのか、どういった関係にある情報なのか、言葉や文章で説明しないとまとまりとして理解することができません。指導としては、示されている情報の読み取り方や他の図や表で示されている情報との関係を言葉（口頭）で説明する練習（プレゼン）を行うとともに、文章でまとめる練習をしていく必要があります。多様で多量の資料に慣れる必要もあり、新聞やインターネットを活用する学習指導などを組み合わせていく必要があると思えます。

Q3 文章でまとめる指導は、どんな点に注意が必要でしょうか？

一般的に「書く」ことには必ず相手がいる目的があるものですが、学校では、練習として「書く」ことが多いので、特に「相手」があいまいになりがちです。普通の授業で、できるだけ「相手」をしっかりと想定・設定し、何を伝えるべきなのか、「目的」を明確にして書き、相手と目的に照らし合わせて文章を読み返す学習や習慣を身につけるといいと思います。書いたものは必ず読まれる、読む人がいる、だから何をどのように説明するかをしっかりと考えて工夫して書く、という学習・習慣です。書き手を育てるには読み手としても育てていく必要がある、ということでもあります。

書き手としての意識が高まれば、それはすなわち読み手としての意識も高まるということです。その逆も言えるのですが、目指したいのは、自分で自分の読み書きを意識し、そのレベル向上を目指す子どもの育成です。先生方が読み書きにこだわる姿を見せることも大事だと思います。

Q4 授業改善のために、我々はどんな意識が必要でしょうか？

これまで実践してきたやり方で、様々な課題を克服できていたのかもしれないですが、たぶんそうではないと思います。自身の担当教科の全国学力・学習状況調査の問題や県の学習定着度調査の問題などを参考に、これまでの自身の授業を見直し、継続・更新すること、変更・廃止することを、まずは自分自身で、そして教科・学年・学校で検討していただきたいと思えます。

「オール出水」教科等部会」開催!!

出水市の子どもに“力をつける”を合い言葉に、誰かがやってくれるだろうと他人事（ひとごと）としてとらえるのではなく、教職員の責務として当事者意識をもってほしいということから、去る5月10日（火）午後、出水市内小・中・義務教育学校の教諭等が集まり、研修会を実施しました。この研修会では、講話に続き、市内の二人の先生による実践発表、そして小学校・中学校別の部会で協議を行いました。以下、全体会での要旨を紹介します。



講話Ⅰ：「『力をつける』をオール出水で考える」学校教育課 眞正 基道 指導監

例えば、本県の在留外国人増加率が全国最高になっていることなどから、今後、文化や言語の異なる人たちと一緒に働く社会になっていきます。変化の激しい社会に向けて、これまでの教育を続けるだけでは、これからの時代に通用する力を子どもたちに育てていくことはできません。

国は「育成すべき資質・能力の三つの柱」として「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を示しています。でも実際に、今の中学校のテスト等は、本当に「思考力、判断力、表現力等」を問う問題になっていますか？

県内の先生方へのアンケート結果からも「学びに向かう力、人間性等」や「深い学び」への意識の低さが分かります。また校種が上がるほど「主体的な学び」を実感できない先生方も増える傾向があります。

授業で資質・能力の3つの柱をバランスよく育成するために、目的・場面・状況を設定した言語活動を行うなど、主体的・対話的で深い学びをバランスよく位置付けなくてはなりません。（下はその一例）

授業改善、家庭学習、生活習慣などの学習場面・学習の機会も含めて、サステナブルに成果を上げていくために、議論を深めていきましょう。

日本文化の紹介（目的場面状況の設定）

- なぜ、この活動をするのかな？
- ・台湾の生徒とのオンライン交流だ！
- いつまでに、何をしよう？
- ・2週間後に向けて、計画しよう！
- これまでに習った、何を使えばいいかな？
- ・説明は現在形で、経験は過去形・現在完了形で！
- うまくできたかな？ 通じた！？
- ・向こうの生徒が、聞いてくれた！

講話Ⅱ：「大学入学共通テストから見た 今求められる力」鹿児島県立出水高等学校長 宮原 義文 先生

【『そんなに多く!? 速く!?』大学入試の傾向】

例えば、大学入学共通テストでは、文系・理系教科を問わず、大量の文章や図表を読み取らせる問題が出題、テキストを速く正確に読む力を重視しています。例えば「国語」では、80分間で総文字数21,010字、原稿用紙52枚分の文章を読み、読み取った情報に基づいて適切に考え、判断する力が求められます。

【生徒たちは対応できているの?】

語彙力、大意をつかむ力、文章の論理構造を捉える力（接続詞を挟んだ前後の文のつながりや全体の関係性をつかむ力）、文章を理解する上で必要な背景知識（社会常識や歴史的知識、基本的哲学的知見等）が十分でない等の理由からテキストを速く正確に読む力が育っていない現状です。

【では、どのような指導・取組が必要なの?】

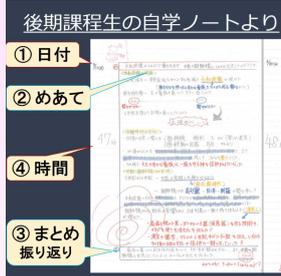
私自身は、論理的な文章を読む力を、「書く」ことで高める取組を実践してきました。例えば、「ディスコースマーカー（接続詞・つなぎ語）」の働きに注目し文と文をつないで書く活動を取り入れるトレーニングの繰り返しで、論理的文章を読む力が高まることができました。

「読むこと」と「書くこと」の関係はインタラクティブです。2つの活動をベースとしながら、速く正確に読み取る力、読み取った情報に基づいて考え、判断・表現する力の育成が必要です。出水市のそれぞれの学校が、独自の方法での取組、その継続によって、これからの時代に求められる力、すなわち、出水市の児童・生徒の可能性を広げることにつながるのではないのでしょうか。

実践発表「自学ノートの取組」 鶴荘学園 小濱 博子 先生

児童生徒自身が課題を見つけ、自身の課題を解決する力を培い、自分の夢を実現していく力を育てるための「自学ノート」の実践例を紹介。

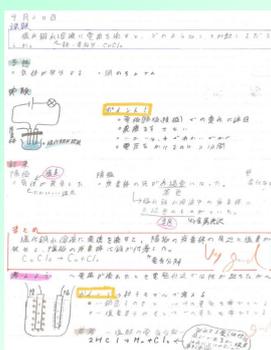
小濱先生は、「自分で目的や課題を意識して取り組んでいることで、例えば、資料から分かることを文章化する力が向上しました。粘り強さや一つ一つの活動をきちんとする態度が高まっていると感じます。」と、確実な効果を力強く語られました。



実践発表「わたしの授業」 米ノ津中学校 平嶺 浩人 先生

自己肯定感を高め、自分の思い・考えを言葉で書かせるために、理科授業で予想・考察・まとめ等を、全生徒がそれぞれ文章の形で書いてまとめる活動を紹介。

平嶺先生は、自らの授業改善への意欲を基に、「理科的な事象に課題意識をもち、自ら解決に挑戦していく生徒を育てたい」と熱く語られました。



【自分の言葉でまとめる生徒のノート例】

〔当日の参加者の声〕

なんとなく理解しているものの読解力の育成等について、どのように大事に理解できました。担当の社会科でも資料の読み取りの鍛え方等、課題が明確になりました。また、社会科部会で話題になったパフォーマンス課題は、生徒に自分で考え表現させる効果的な取組だと学べました。自学ノートや授業の進め方と合わせ、今後の授業・指導改善につながる貴重な機会となったと感じました。

【出水中：榮川 丈先生】

【編集後記】市内すべての先生方に向けて、「力をつける」特集を組みました。学力向上に向けて、今後、あらゆる視点からアプローチしていただければ幸いです。